

## 武蔵野大学BASIS建学科目「共生社会」における体験型授業の実践報告： 看護学科教員として授業の一部を担当して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Inclusive society, Liberal arts education, Nursing faculty, Experience and leaning system 作成者: 山本, 摂子, 小町, 美由紀, 後藤, 優子, 町田, 貴絵, 石橋, タミ, 大和田, 信行, 三好, しのぶ, 金, アンナ, 栃原, 綾, 増田, 道生, 三觜, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1354">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1354</a>

## 武蔵野大学 BASIS 建学科目「共生社会」における 体験型授業の実践報告

— 看護学科教員として授業の一部を担当して —

Report on the experience-based class “Inclusive Society” in Musashino BASIS\*

— The class was partially conducted by nursing faculty members —

山本 摂子<sup>1</sup>      小町 美由紀<sup>1</sup>      後藤 優子<sup>1</sup>      町田 貴絵<sup>1</sup>  
Setsuko Yamamoto      Miyuki Komachi      Yuko Goto      Takae Machida

石橋 タミ<sup>1</sup>      大和田 信行<sup>1</sup>      三好 しのぶ<sup>1</sup>      金 アンナ<sup>1</sup>  
Tami Ishibashi      Nobuyuki Owada      Shinobu Miyoshi      Anna Kim

栃原 綾<sup>1</sup>      増田 道生<sup>1</sup>      三觜 久美子<sup>1</sup>  
Aya Tochihara      Michio Masuda      Kumiko Mitsuhashi

### 要 旨

国連による持続可能な開発目標（SDGs）が目指す「誰一人取り残さない」社会の実現に向けて、全員参加型の「共生社会」の実現が望まれている。総合大学である本学において、2019年度から教養教育プログラム「武蔵野 BASIS\*」の1科目として「共生社会」が複数教員の乗り合い（オムニバス）形式で開講され、「病や障害のある人の体験から共生社会を考える」ことを目的に看護学科教員が授業の一部を担当し、113名の学生に看護学科演習科目における体験型の取り組みを用いた授業を実施した。学生たちは妊婦、高齢者、肢体不自由、内部障害等を持つ人の健康体験から、不自由さや制限を素直に実感し、生活上の困難や障壁について学びを得ていた。看護学科教員が担当した体験型授業は、学生が想起する健康とは異なる健康体験にある人の生活を考え、その人らしく生を全うすることの理解の一端となることに貢献したと思われる、学生たちは全員参加可能な「共生社会」目指す学びを得たと考えられた。

キーワード：共生社会 教養教育 看護学科教員 体験型授業

Key word：Inclusive society, Liberal arts education, Nursing faculty, Experience and leaning system

\* “Musashino BASIS” which was made from the spirit of the establishment of the university.

1 武蔵野大学 看護学部 Musashino University, Faculty of Nursing

## I. はじめに

国連による持続可能な開発目標（SDGs）が目指す「誰一人取り残さない」社会の実現に向けて、我が国においては、2013年の障害者差別解消法の制定を機に、全員参加型の「共生社会」の実現が望まれている。「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である（文部科学省、2013）。それを受け、本学において教養教育プログラム「武蔵野BASIS」建学科目として2019年度から「共生社会」が開講された。

本学は11学部19学科を有する学生約9000人の仏教系の総合大学である。看護学部の理念は、「仏教精神を基盤とした豊かな人間性を培い、看護専門職に必要な基礎的能力を身につけ、社会のさまざまな領域で人々の健康および福祉の向上に貢献できる看護実践者および将来の看護指導者を養成する」である。その理念を基に看護職である看護学科教員は、学生たちに看護基礎教育を実践している。看護基礎教育では、学生が看護の対象となる人々の理解に努め、相手の立場に立つことができるように、当事者体験の理解、そして共に在ることを考える体験型授業を取り入れ、看護学科においても、同様の体験型の取り組みを取り入れている。

看護基礎教育における体験型授業から、学生が自分とは異なる体験を持つ人について何を学び得るのかを概観すると、妊婦体験から「体を感じる重みと危険」(片倉, 小堀, 2018), 「妊婦の身体理解と妊婦を思いやる気持ち」(大林, 2009), 「妊婦の思いと不便さ」(井上, 2007), 「日常生活行動の困難」(石原, 白杵, 松村, 2005)(笹野, 加城, 高塚, 阿部, 四方, 和田, 2005), 高齢者体験から「高齢者の特徴理解」(吉岡, 三井, 日詰, 岡本, 須山, 2017, 2018), 「高齢者への配慮」(緒方, 竹山, 土屋, 2011), ストーマ装着体験から「心理的抵抗感」(有澤, 立石, 太田, 西久保, 村上, 2017), 「ボディイメージの変化」(杉崎, 小河, 奥田, 大久保, 2007)との報告がある。

そこで、筆者らは「共生社会」の授業の一部を担い、学生たちが体験を中心とした授業から自分とは異なる健康体験を持つ人について考えることを狙って体験型授業を行った。本稿では、「共生社会」において授業を展開するうえでの方法、および担当教員が授業終了後に捉えた内容をふまえ、看護学科教員が携わった意義について、看護学科教員の視点から報告する。

尚、倫理的配慮として、看護学科教員、Student Assistant（以下、SA）、学生の個人の特定につながる情報は排

除し、個人名とデータが連結不可能な形で匿名化した。また、看護学科教員とSAに、授業の結果について話した内容をデータとして使用することの承諾を得た。

## II. 授業の実際

### 1. 武蔵野BASIS 建学科目「共生社会」

武蔵野大学における全学共通の教養教育プログラム「武蔵野BASIS」は、大学での学修の共通基盤となる知識と技法を習得、および基礎教養科目として人文・社会・自然の諸分野を学ぶことにより、広い視野を備えた優れた人格の形成を目指している。「武蔵野BASIS」は、「心とからだ」、「学修の推進」、「外国語」、「自己理解・他者理解」、「キャリア開発」の5つの科目群から構成されている。科目群「心とからだ」には「健康体育科目」と「建学科目」がある。さらに「建学科目」に属する選択科目のひとつに「共生社会」と他には必修科目「仏教概説」がある。教養科目「共生社会」は、本学の建学の精神に基づいた社会に貢献する社会人を育てる選択科目であり、全学科学学生の履修が可能である。

「共生社会」は、SDGsが目指す、障害の有無にかかわらず全ての人々が共に生きる社会の一員としての知識や技能を学び、多様な視点の習得を目指す授業である。その到達目標には、以下3つが掲げられている。即ち、1. 関心・態度・人格の到達目標として「それぞれに異なる個性を持つ人々と共に生きる上で、他者を尊重する適切な態度と行動を取ることができる」、2. 思考・判断の到達目標として「共生社会の推進に向けて、社会に横たわるバリアを多面的・多角的に認識し、その解消に向けた行動を主体的に判断することができる」、3. 実践的スキル・実現の到達目標として「他者との対話を通じて、あるべき社会の幸せについて、協力し、積極的に実現しようとすることができる」である。これらを踏まえて、看護学科教員は、学生が様々な健康体験を看護の視点から少しでも理解できるような授業を行うこととした。

授業全体は、複数の専任教員および非常勤講師が担当する乗り合い（オムニバス）形式によって実施された。第1回・第2回は2050年の未来を眺望し、世界が直面する課題に向き合う姿勢や思い、本学の3つの行動指針「響き合い、高め合う、スパイラル」の理解と多様な視点を習得できる意義と態度に関する講義が実施された。第3回では、共生という考え方および意味と意義、第4回ではSDGsの解説と実現のための行動について講義が行われた。第5回・第6回では本稿で報告する自分とは違う状況の体験、第7回・第8回ではダイバーシティについてのフィールドワーク、第9回・第10回では障害者スポーツ体験という

体験型授業が実施された。第11回・第12回は異文化コミュニケーションの理解を深める、偏見や差別について、第13回・第14回は知的障害・発達障害への配慮の講義があり、第15回・第16回ではこれまでの授業を踏まえて、

全ての人と共に生きる社会の実現に向けて取るべき行動について、学生たちが演習形式で考えた。2019年度「共生社会」授業内容を表1に示す。

表1 2019年度 共生社会 授業内容

授業回	内 容
第1回 第2回	本科目が武蔵野大学での学びにどのようにつながるのか。受講生が社会の中核で活躍する2050年の未来を眺望し、世界が直面する課題にどのように向き合っていくのか。本学の3つの行動指針「響き合い、高め合う、スパイラル」を理解し、多様な視点を習得する意義を理解する。
第3回	法学、経済学、生物学、仏教学などの学問分野から「共生」を考える「共生学入門」ともいうべき授業を「大教室双方向授業」で実践する。
第4回	国際社会の共通目標であるSDGsの内容を解説し、SDGsを実現するための実際を報告する。
第5回 第6回	【体験を通して共生社会を考える】妊婦、高齢、車椅子での移動などの体験を通して、自分とは違う状況にある人の理解に努め、相互に人格や個性を尊重し合うこととはどういうことかを考える。
第7回 第8回	ユニバーサルデザインについて、バリアフリーとの対比をすることで理解を深め、ダイバーシティとインクルージョンについても、その考え方を社会的背景をふまえて解説する。キャンパス内をグループで散策し、どんな工夫（課題）があるかをチェックし、グループワークにてまとめる。
第9回 第10回	肢体不自由の人のためのスポーツ「ボッチャ」、視覚障害者のためのスポーツ「ブラインドサッカー」を実際に体験し、障害者スポーツを通して共生社会に対する理解と将来的なその実現に向けての考察を促す。
第11回 第12回	異文化コミュニケーション学の視点から、共生について理解を深める。
第13回 第14回	障害者（知的障害者・発達障害者）が地域で生活するために必要な配慮を学び、ディスカッションを交えながら、共生社会について考える。
第15回 第16回	これまでの授業内容を踏まえ、全ての人と共に生きる社会の実現に向けてどのような行動を取っていくべきかを改めて考える。その内容を教場でレポートにまとめる

## 2. 看護学科教員担当授業「体験を通して共生社会を考える」展開

### 1) 参加学生の状況

履修登録学生数は130名、そのうち体験型授業に出席した学生は113名であった。学生の所属学科と学生数の内訳は、日本文学文化学科9名、グローバルコミュニケーション学科27名、日本語コミュニケーション学科7名、法律学科27名、政治学科5名、経済学科7名、経営学科4名、会計ガバナンス学科1名、人間科学科2名、社会福祉学科9名、環境システム学科9名、数理工学科4名、薬学科1名、看護学科1名であった。

### 2) 授業展開

#### (1) 授業担当者

体験型授業は、看護学科教員（以下、教員とする）11名、看護学科4年生SA 7名の計18名が運営した。教員は、母性看護学領域、小児看護学領域、成人看護学領域、老年看護学領域、精神看護学領域に所属する教員であった。これらの教員らは、看護技術を履修する演習科目においても体験型の取り組みをしていることから、各担当者がそれらを持ち寄る形で授業を展開した。SAは、主に実習にて経験した体験型授業のサポートを担い、教員とともにグループワークのファシリテーターも担うこととした。

#### (2) 授業方法

授業は、以下の授業の目的、授業スケジュール、授業体験の目標と内容、グループワーク、教員及びSAの支援方法にて実施した。

##### ① 授業の目的

「自分とは違う状況を体験して共生社会を考える」ことを目的とした。本授業においては、保健医療を担う看護の立場から、学生が想起する健康とは異なる健康体験、即ち妊娠や加齢による身体変化および肢体不自由や内部障害等多様な状況を設定し、その体験の後に自分とは異なる状況にある人の生活上の困難や障壁を考えることとした。

##### ② 授業スケジュール

授業は、前半に受講生が妊婦・高齢者・様々な障害などの「自分とは違う状況の体験」をして、体験後に学生たちがグループで気づきや感想を話し合い「共生社会を考える」スケジュールとした。授業スケジュールは、履修学生を均等に4チームに分け、4つのチームが時間内に入れ替わり体験できるように組んだ。一つの体験は20分程度で実施するが、教員やSAが、学生たちが確実に体験できるようタイムマネジメントを徹底して誘導した。殆どの学生が医療・福祉に関する学習経験がないため、移動時の安全を優先して、妊婦体験と車イス体験には教員とSAを多めに配置した。高齢者、内部障害（直腸機能障害）、動画視

聴は学生全員が体験，移動時の安全確保に課題があり，かつ装具数が限られる妊婦および車椅子体験はどちらかを体験することとした。「体験を通して共生社会を考える」授業スケジュールを表2に示す。

表2 「体験を通して共生社会を考える」授業スケジュール

履修登録 130名	Aチーム 33名		Bチーム 32名		Cチーム 32名		Dチーム 33名	
	A-1 16名	A-2 17名	B-1 16名	B-2 16名	C-1 16名	C-2 16名	D-1 16名	D-2 17名
オリエンテーション								
体験①	妊婦	車イス	難病		内部障害		高齢者	
体験②	高齢者		妊婦	車イス	難病		内部障害	
体験③	内部障害		高齢者		妊婦	車イス	難病	
体験④	難病		内部障害		高齢者		妊婦	車イス
グループワーク (23グループ、学科、チーム混合、1グループ：6～7名)								

③ 体験内容の目標と内容

体験内容は、妊婦、高齢者、車イス移動、ストーマ装具の装着とし、具体的に以下の体験方法から生活上の困難が体験できることを目指した。また、筋委縮性側索硬化症

(Amyotrophic lateral sclerosis；以下、ALS)を持ちながら生活する人の動画視聴から、生活上の困難を想像することとした。各体験の具体的な目標と内容は以下であった。詳細を表3に示す。

表3 「体験を通して共生社会を考える」授業 体験の目標と内容

自分とは違う状況の体験			
種類	体験の目標	体験の内容	担当
妊婦	妊娠中に母体にかかる負担や動作制限を体感する。	1. 妊婦ジャケットを着用して胎児と羊水を模した腹部の重さや容積を体感する。 2. 妊婦ジャケット着用にて体を動かし、狭い場所の歩行の難しさ、段差や自分の足元が見えなさを実感する。	教員2名 SA 2名
高齢者	加齢による視力や聴力の衰え、上肢の関節可動制限を体感する。	1. 高齢者体験道具：グローブ、肘カバー、ゴーグルを装着、さらに耳栓を装着して、肘と手首の関節運動の制限、視力と聴力の低下を体感する。 2. 1. の状態で、説明を聞き、署名欄への氏名記載を試み、文字の書きにくさ、見えにくさ、聞こえにくさを実感する。	教員3名 SA 2名
車イス移動と介助	学生自身が行う車イス移動、人に介助される車イス移動、人を介助する車イス移動を体験する。	1. 学生2人が1組となり、1台の車椅子を使用する。車イス乗車と車イス介助を交代して、キャンパス内の廊下やスロープ、階段、石畳や庭にて車イス移動を体験する。 2. 車イス乗車学生は、車イスを自分で操作して、移動の困難を体験する。 3. 車イス乗車学生は、ペア学生の介助による車イス移動を体験して、乗車時の安楽が介助の方法により異なることを体験する。 4. 車イス介助学生は、路面の種類により押す力や介助方法に違いが生じること、および乗車している人の安楽や気分への影響を実感する	教員3名 SA 2名
内部障害	外見からは見えない障害を持つ人の生活を体験する。	1. 人工肛門を有する人が用いるストーマ装具を洋服の上に貼り付ける。 2. ストーマ装具内に入っている固形物を装具の出口から出して、異なる方法での排泄を体験する。	教員2名 SA 1名
難病	難病を持つ人や家族の想い、生活を想像する。	ALSを持ちながら生活する人の動画を視聴して、その人や家族の想い、生活そのものを想像して想いを馳せる。	教員1名

体験を共有して共生社会を考える			
グループワーク	自分とは違う状況の人に人格や個性を尊重し合うこととはどういうことかを考える。	1. 「自分とは違う状況にある人の生活の体験から、互いを尊重し共に社会で生きていくこと」をテーマに、異なる学科学生で構成した6～7名ずつのグループに分かれ意見交換を行う。 2. グループごとに出た意見を、全体に向けて発表する。	ファシリテーター：教員・SA 全員

・妊婦体験

妊娠中に母体にかかる負担や動作制限を体感することを目標とした。体験は、学生が5～6kg程の重量がある妊婦ジャケットを上半身に装着して、胎児と羊水を模した腹部の重さや容積を体感することを意図した。さらに妊婦ジャケットを装着したまま、教室内の机やいすの間、教室内の段差がある場所を歩行したり、その場でしゃがんだり、仰向けになったりと体を動かした。さらに、狭い場所の歩行の難しさ、段差や自分の足元が見えなさの実感を想定した。担当は、教員2名とSA2名とした。教員とSAは、学生の妊婦ジャケット装着の介助、および妊婦ジャケットを装着しての歩行や活動が安全に行えるように声をかけ、必要時に注意を行うこととした。

・高齢者体験

加齢による視力や聴力の衰え、上肢の関節可動制限を体感することを目標とした。学生は高齢者体験道具のグローブ、肘カバー、ゴーグル、さらに耳栓を装着して、肘と手首の関節運動の制限、視力と聴力の低下を体感することを意図した。さらにその状態で、説明を聞き、署名欄への氏名記載を試み、普段とは違う文字の書きにくさ、見えにくさ、聞こえにくさの実感を想定した。高齢者体験専用の特殊な装具を使用するため、担当は教員3名とSA2名とした。教員は装着物の介助と作業の指示を担い、SAは演習や実習での体験を活かし、装着の介助を行うこととした。

・車イス移動と介助

車イス移動と介助体験では、学生自身が行う車イス移動、人に介助される車イス移動、人を介助する車イス移動の3つの立場からの体験を目標とした。学生2人が1組となり、1台の車椅子を使用して、乗車と介助を交代して、キャンパス内の廊下やスロープ、階段、石畳、芝生や土にて車イス移動を体験することを意図した。乗車した学生は自分で操作を行い、移動の大変さ、およびペア学生の介助による車イス移動から、乗車時の安楽が介助の方法により異なることを体験した。車イス介助学生は、路面の種類により押す力や介助方法に違いが生じること、乗車している人の安楽や気分への影響の実感を想定した。車イスの操作が初めての学生が多いことを考慮し、学生の安全を保障するため、担当は教員2名とSA2名とした。教員とSAは学生が安全に車イスを使用できるよう、安全に留意した操作や介助方法の説明や声かけを行うこととした。

・内部障害

内部障害の体験では、学生が外見からは見えない障害を持つ人の体験をすることを目標とした。学生たちは、内部障害の中でも直腸機能障害である人工肛門を有する人が用いるストーマ装具を洋服の上に貼り付けた。そして、あらかじめストーマ装具内に入っていた固形物を装具の出口か

ら出すという自分たちとは異なる方法での排泄を実施することを意図した。移動が伴わず、装着物も1点のみのため、担当は教員2名とSA1名とした。教員は人工肛門の説明、ストーマ装具の管理、多機能トイレ等の解説を担当、SAは実習からのストーマ装具を装着しながら生活する人への援助の学びを学生に伝えることとした。

・難病（ALS）

難病であるALSを持つ人や家族の想い、生活を想像することを目標とした。動画を視聴して、その人や家族の想い、生活そのものを想像して想いを馳せてもらうことを意図した。動画では、自力での呼吸や食事、移動や発語ができず、人工呼吸器装着、経管栄養、車イスでの移動、文字盤を用いたコミュニケーション、家族や様々な人からの支援を受けながら生活している人の実際の生活が紹介されている。動画視聴のため、担当は教員1名とした。非医療・福祉系学生が多数であるため、教員は、視聴前に病気の簡単な説明を行うこととした。

④ グループワーク

全ての体験終了後に、学科および体験チームが異なる学生で構成した5～6名ずつのグループに分かれ、「自分とは違う状況にある人の生活の体験から、互いを尊重し共に社会で生きていくこと」をテーマに学生たち各々の体験の共有と意見交換を計画した。さらに、グループごとに出た意見を、学生全員が全体に向けて発表することとした。

⑤ 教員およびSAの支援方法

教員は、学生たちが自分とは異なる他者の体験ができ、体験をもとに自分とは異なる他者について考えるようにSAと共に支援を行った。教員は担当した体験において、当事者の状況を学生たちが理解できるように説明を加えて解説した。さらに、他者の健康体験や状況を理解することは難しいが、理解しようとするのが大切なことを強調して伝えた。SAたちは、これまでの看護学科での授業・演習・実習を通しての学びを活かして、教員と連携して他学科学生が装具を装着することを支援、また学生が体験している当事者の状況について説明した。

3. 看護学科教員からみた授業「共生社会」

授業終了後に教員とSAは、学生が想起した健康とは異なる健康体験と、体験後のディスカッション、および発表の様子から捉えた学生の学びの内容を共有した。以下に、それらの内容および看護学科教員が「共生社会」を担当する意義について述べる。

1) 教員が捉えた自分とは異なる健康体験からの学生たちの学び

教員は、様々な健康体験を通して学生が語った学びに

ついて以下の内容を述べた。妊婦や高齢者体験中の学生たちについては、「からだ動かさずらく、思い通りに動けないことに驚いていた」「日常生活の何気ない動作が妨げられ、身体の活動能力の低下や不自由さを実感できていた様子であった」との印象が語られた。車イス体験では、「車イスの自走・自操には腕の力が相当必要と驚いていた」「路面に凹凸があると、介助者は介助しにくい、乗車者は振動を感じ乗り心地が悪いと言っていた」「車イスは歩行時とは視線が変わり低くなると感じていた」「介助されての車イス移動は、自分の意思が反映されず、どこに行くのかわからず不安と話していた」と学生たちが体験から実感したことが語られた。内部障害については、「人工肛門を知っていた学生は少なく、説明を聞いて初めて知った様子だった」「外見からはわからない障害があることに素直に驚いていた」「多機能トイレやセルフヘルプマークの説明に頷いていた」「神妙な表情で体験していた」と外見からは見えない障害を初めて認識していた様子を語った。家族と生活し海外旅行もするALS患者の映像については、「食い入るように観ていた」と興味と関心を抱いた様子が語られた。また、教員とSA全員が、授業中の学生たちが真剣な表情で体験に取り組む姿に感心したと語った。

また体験後の学生たちのディスカッションや発表から、学生たちは「思い通りの行動ができないことは想像以上に大変、健康に感謝したいと体験後の感想を素直に言葉にしていた」「外見だけで判断しない、自分たちから歩み寄って理解したいと考えていた」「車イスの邪魔をしないように歩行する等、すぐにできる行動を考えて共有していた」と捉えた。教員は、学生たちが体験した後すぐに異なる健康体験への自分の認識を見直す思考力、および自分たちができる手助けを言語化して共有し発信できる表現力を有することを見出した。

また教員とSAは、学生全員が安全かつ円滑に様々な健康体験を行うことができたからこそ、この学びを得ることができたと捉えた。これは、100名超の非医療系学生の安全性を考慮して、18名の教員とSAが授業担当できるよう学習環境を調整した成果であるとの意見があった。SAは学科の授業や演習、特に実習でのチーム連携の体験を活かして教員とともに支援を実施できたと語った。

## 2) 看護学科教員が「共生社会」の授業を担当する意義

本授業を担当した教員は、学生たちは妊婦、高齢者、肢体不自由、内部障害等の他者の健康体験から、不自由さや制限を素直に実感し、生活上の困難や自分たちができていることを考えたことと捉えていた。また学生たちは、自分たちが思っていた以上にこれらの健康体験が生活全般に不自由や制限を持っていることに対して、自分たちが歩み寄り認識

を変えることが行動することが大切であると学んでいた。

このように学生たちは、人生における妊娠や加齢というライフイベントの体験、障害等の体験から、生活上の困難や障壁について考える機会を得ていた。これらは本授業を看護学科教員が担当したことから得られたと考えられた。看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象とし、対象が本来持つ自然治癒力を発揮しやすい環境を整え、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通して、その人らしく生を全うすることができるよう身体的・精神的・社会的に支援することを目的としている（日本看護協会、2007）。看護は対象となる人がどのような力を持っているかに焦点を当て、理解しようとすることから始まるといえる。この看護の目的を共有する教員が授業を担当したことにより、学生が想起する健康とは異なる健康体験を持つ人々の生活を考え、その人らしく生を全うすることへの理解の一端となることに貢献したと思われた。このことにより、看護学科教員が担当した本授業は、様々な健康状況にある人々が全員参加可能な「共生社会」の目的の達成につながると考えられた。また教員とSAが非医療系学生という特徴を踏まえ、チームで実践する看護の実務経験を活かして連携できるように環境を調整したことが、安全で円滑な学生の健康体験を可能にする要因となっていた。

学生たちが授業において意見を交換し堂々と発表していたことから、「武蔵野BASIS」における講義と討論を通して、主体性や発信する力を学んでいる身につけていることを教員は実感することができた。しかし、学科横断の乗り合い（オムニバス）形式で行われた授業「共生社会」における他学科担当授業との学びの共有は十分に行われておらず、今後の授業の発展における課題である。

## Ⅲ. おわりに

武蔵野BASIS 建学科目「共生社会」にて、看護学科教員11名および看護学科4年生SA7名が、体験型授業「体験を通して共生社会を考える」を複数学科113名の学生に実施した。受講した学生たちは、自分が想起する健康とは異なる健康体験を通して、生活上の困難や障壁について考え、「共生社会」を目指す学びを得たと考えられた。

授業を終えて、総合大学における「共生社会」授業の一部を看護教員が担うことにより、全員参加型の「共生社会」の目的達成の第一歩となり得ることが見えてきた。一方で、学科横断の乗り合い（オムニバス）形式で行われた授業「共生社会」全体を通しての学生の学びについて、看護学科担当授業と他学科担当授業との共同については課題が残った。他学部と連携やその効果については今後の課題

としていきたい。

## 謝辞

授業および本報告にご協力、並びにご支援いただいた全ての方々に感謝申し上げます。

## 利益相反

本報告における利益相反は存在しない。

## 引用文献

- 有澤舞, 立石和子, 太田美帆, 西久保秀子, 村上希 (2017). 装着型ストーリーモデルを用いた体験的演習による学生の学び成人看護学演習レポートの分析, *東京家政大学研究紀要 (自然科学)*, 57 (2), 35-41.
- 井上理絵 (2007). 体験を生かして学びを深める 妊婦体験モデルを用いた授業効果, *旭川研究年報*, 38 (1), 100-104.
- 石原留美, 白杵百合子, 松村恵子 (2005). 男女ペアで学びを深める妊婦体験ジャケットの学習効果, *香川母性衛生学会誌*, 5 (1), 82-88.
- 片倉裕子, 小堀ゆかり (2018). 看護学生が学んだ妊婦像 疑似妊婦体験学習と母性看護学実習を通して, *北海道文教大学研究紀要* 42, 113-122.
- 川原幸江, 中野栄子, 前原靖子, 浦邊尋美, 国師由香利, 石沢隆 (2001). ストーリー教育に自作のゴム布によるモデルを活用した試み, *鹿児島大学医学部保健学科紀要*, 11 (2), 25-29.

- 文部科学省 (2013). 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告. from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm)
- 日本看護協会 (2007). 看護に関わる主要な用語の解説—概念的定義・歴史の変遷・社会的文脈—. from <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/yougokaisetu.pdf>
- 緒方昭子, 竹山ゆみ子, 土屋八千代 (2011). 高齢者体験セットを用いての片麻痺高齢者の車いす移乗・移送の演習評価 看護師役・高齢者役・観察者の3側面の学生の記録より, *南九州看護研究誌*, 9 (1), 39-46.
- 大林陽子 (2009). 母性看護学における看護学生の疑似妊婦体験の学習効果の検討, *日本看護学会論文集 看護教育*, 39, 6-8.
- 笹野京子, 加城貴美子, 高塚麻由, 阿部正子, 西方真弓, 和田佳子 (2005). 看護学生における妊婦体験学習効果, *新潟県立看護短期大学紀要*, 10, 1-8.
- 杉崎一美, 小河育恵, 奥田淳, 大久保仁司 (2007). 看護学生のストーリー演習前後のイメージ変化と学び 自作模擬ストーリーモデルを導入して, *日本看護学会論文集 看護教育*, 37, 342-344.
- 吉岡由喜子, 三井京香, 日詰佳世, 岡本祐佳里, 須山浩代 (2018). 事例と高齢者体験装具を使用した高齢者看護過程の授業研究 実習での効果と課題, *日本看護学会論文集 看護教育*, 48, 63-66.
- 吉岡由喜子, 三井京香, 秦康代, 須山浩代, 日詰佳世, 岡本祐佳里 (2017). 事例・高齢者体験装具を使用した高齢者の看護過程の演習効果, *日本看護学会論文集 看護教育*, 47, 67-70.